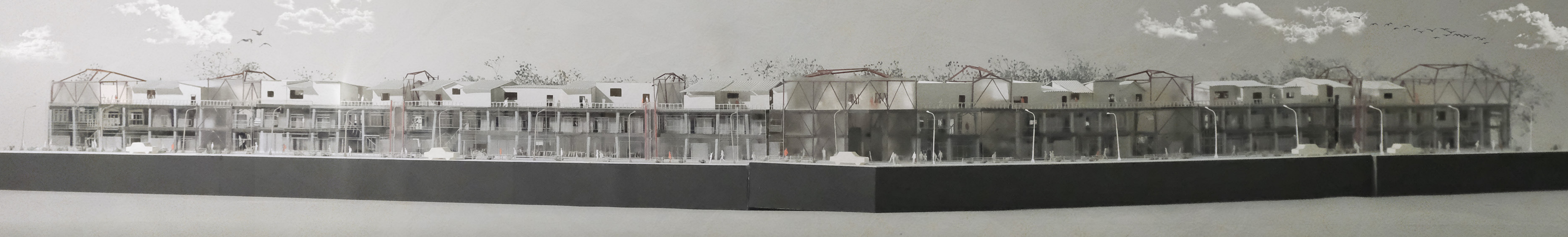


清澄アーカイブス

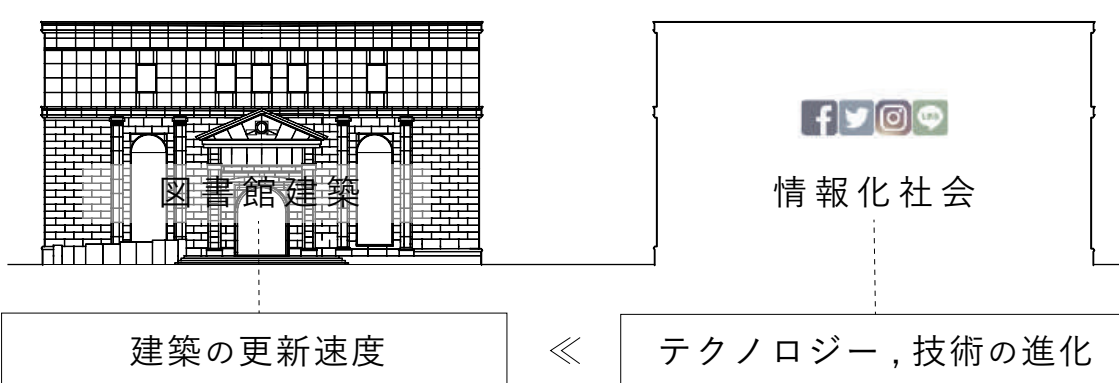
築 95 年の RC 造長屋『旧東京市店舗向住宅』の変遷の先に考える、250m の「未完建築」で応答するノスタルジー



background

1. 図書館という建築の存在意義

「図書館」という建築は、いずれ無くなるかもしれない。インターネットの発達、SNS の普及で情報を得ることは簡単になった。図書館は堅牢なイメージと共に、その存在を成立させてきたが、特異な機能を持つ図書館という建築は、時勢によりその**存在意義が曖昧**になっている。



concept + vision

2. 生きられた図書館

これらは、街が、住人が、その地が、そして設計者の私が、**自らの世界をアーカイブする所作**である。
人と建築と街の応答が持続する限り、そこにはまた新たに「建築の肉」が生成し、それらは確かに建築の変遷と地続きになった、**未来を意思する存在**へととなるだろう。それこそが、本質的な「図書館の存在意義」ではないか。

1 - 創作の手がかり

私が見た風景と心象風景の間の裂け目に現れて、それらの**相互関係と重み**を自覚させた。私はそこにノスタルジーを感じる。

旧骨格：RC 造ラメンフレームが作る長屋
生成された肉；ファサード、屋上、その他の増築

個人の記憶の変異体



2 - 応答

建築（旧東京市店舗付住宅）を介した過去の出来事、そこにあった営みを考え抜き、建築に**新たな骨格**を付与する。

新骨格：S 造耐震補強フレーム、木造軸組増築、RC 耐震壁

現在という**一時点**の設計

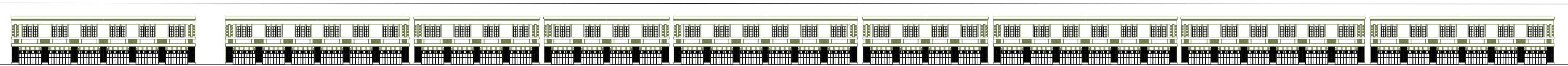
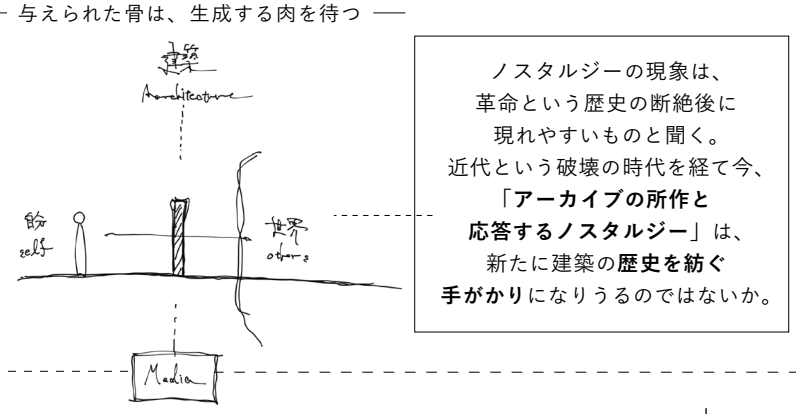


3 - 少し先のこと

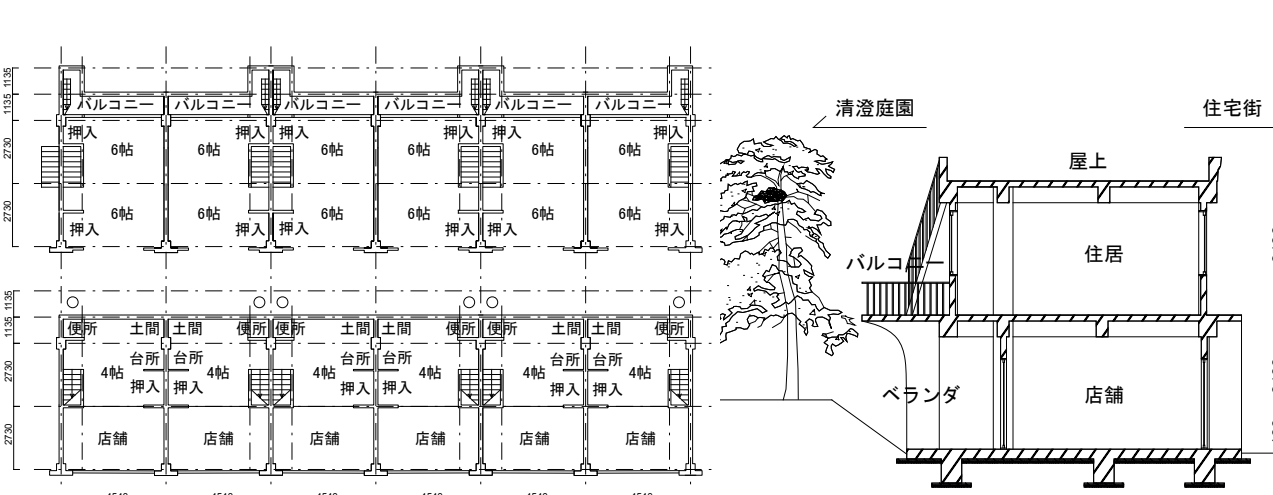
建築という**媒介物**を通して明るみになるノスタルジー。その建築は街と人を繋ぎ、**未来を意思するもの**になる。

新生成肉：??

集会的記憶の母体へ



初期部分（1928-）



竣工時（1928 年）平面図

竣工時（1928 年）断面図

3. 旧東京市店舗向住宅

清澄庭園に張り付くよう**全長 250m**に渡り「旧東京市店舗向住宅」が建っていた。
都営大江戸線 2 駅の間、下町らしい住宅街と緑豊かな清澄庭園の境界に位置し、それらを**分断する**ように建っている。
昭和 3 年に竣工してから多くの経歴があり、住人による自由な増改築によって表情を変えながら現在もその存在を残している。
その**表情**は街と密接な関わりを持ち、地域に愛されてきた。現在は築 95 年になり、**空き家化、老朽化、廃墟化**が進んでいる。
ここを本計画地に定め、計画を行う。

旧東京市店舗向住宅の遷移

三菱地所管理で木造長屋が 100 軒近く建っていた

- 1923 関東大震災 庭園、長屋 壊滅
- 1928 三菱地所が公園拡張地として東京都に東京市に土地を寄付
- 1928 旧東京市店舗向け住宅 竣工（耐火性の観点から RC 造）

『旧東京市店舗向住宅』誕生

1945 東京大空襲で庭園は壊滅したものの、長屋は焼ける

1953 長屋の土地が住民に払い下げられる
建物の所有権が住民に移行

住人の自由な改築、増築が始まる

1987 東京都の立退勧告によって
長屋が一部買収される

2023 空き家化、廃墟化、退廃化、高齢化 etc..

街と旧東京市店舗向住宅にまつわる オーラルヒストリー

地域誌や聞き取り調査で様々な言葉を得た。

「通りの向こう側からたくさんの人がウチに逃げてきて、火の粉で熱くなったガラス窓を濡れ雑巾でみんなで叩いてくれたそうよ。」

「うちは当時としては珍しく内風呂があり、その水でなんとか火を消し止めて、壁 1 量の被害で済んだんです。」

「裏の空地や屋上を農園にして野菜を作っていた。」

「戦後しばらくは清澄銀座商店街とってお客さんが大勢くるような商店街でした。」

「戦後直後から多くの買い物が来て、清澄銀座商店街と名乗った。」

「シャッターを閉める店が増え、名前を「清澄通り会」に名前を変えた。」

「時間の経過とともに住人の高齢化が進みさらに売却がしたいと考える人も出てきた。」

「さらに空地や空き家が増え、地区の空洞化が進む危険があります。」

「なんの前触れもなく突然 5 年以内に立ち退きなさいと東京都から言われたんです。土地も建物も自分のものなのにおかしいですか。」

「これ以上シャッター通りにしたくはありません。空き店舗を利用して観光客の憩いの場を作ったり、この街ならではの町づくりを進めているようがんばりたい。」

「今まで売却したのは 6 軒が一体となった長屋の両端の人だから問題なかったが、今後 6 軒長屋の真ん中に住んでいる人が解体してしまうと、建物の耐震性などが危惧されます。」

S=1/400 竣工時（1928 年）東側立面図



建物の取り壊しが行われた場所（2023-06/12 作者撮影）



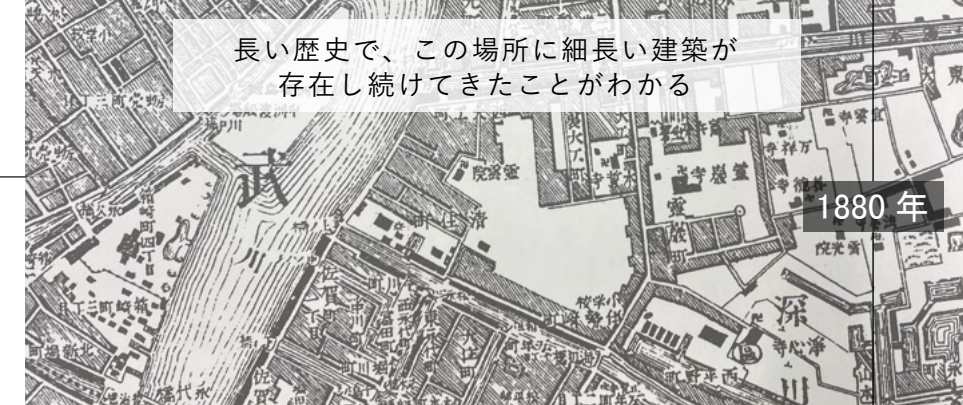
現在の様子（2023-06/12 作者撮影）



初期部分（1928-）

改築部分（1953-）

S=1/400 調査時（2023 年 6 月）東側立面図



長い歴史で、この場所に細長い建築が存在し続けてきたことがわかる

1880 年



1909 年



1937 年



1945 年



1956 年

5. 残す、蘇る、生み出される要素

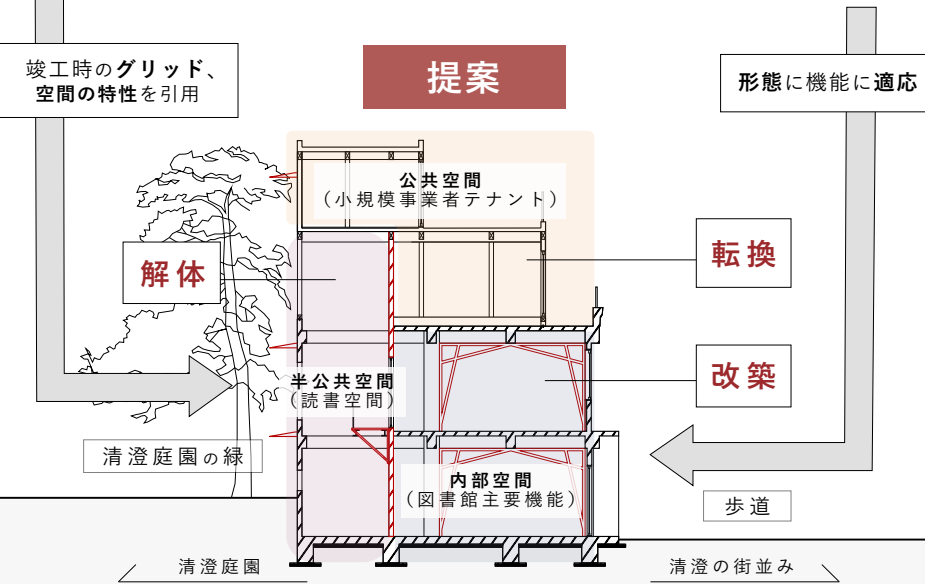
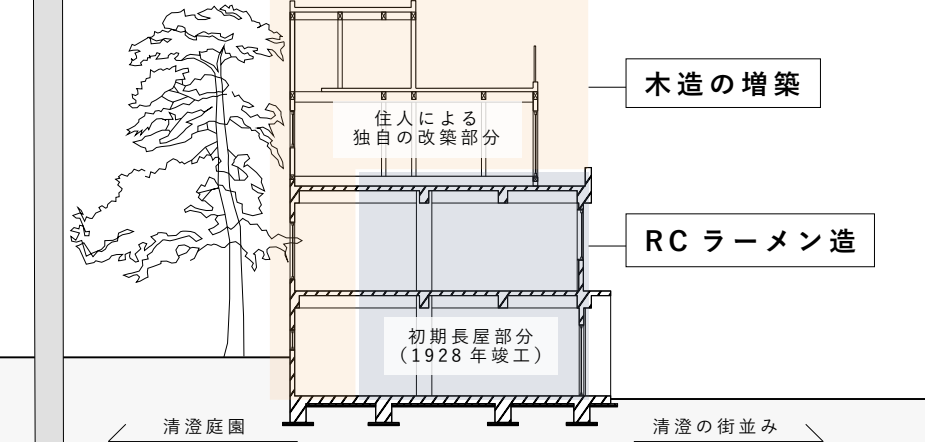
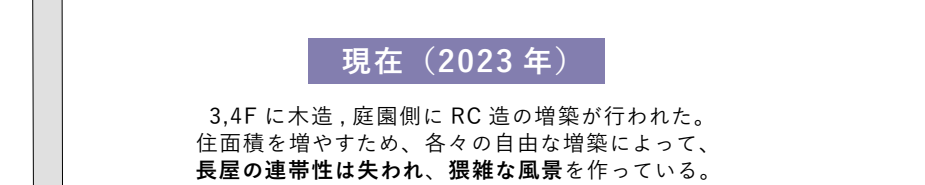
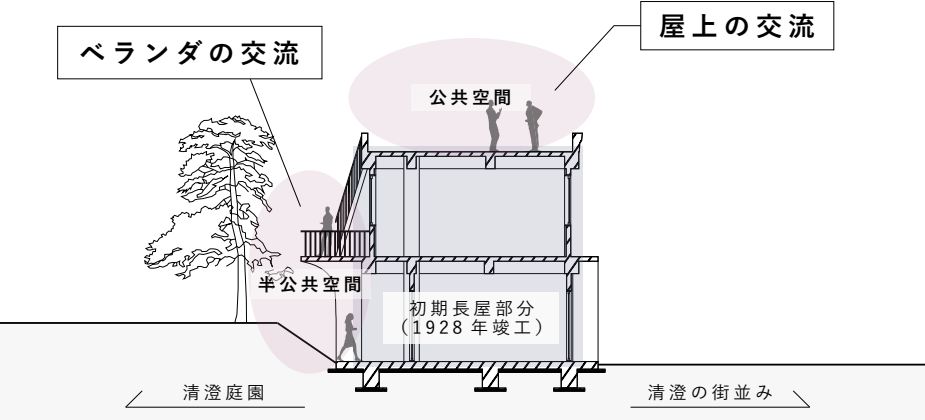
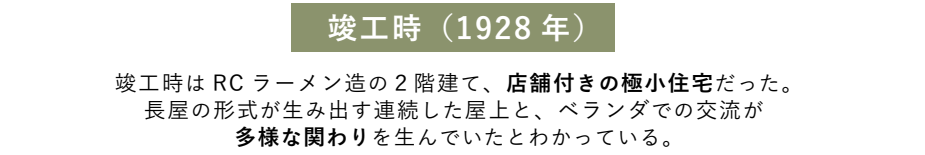
竣工時の建築に、住人による独自の増改築が重ね重ね行われてきた。その偶然のコンポジションが現在の風景を作っている。その中で生まれた要素をまとめ、価値と定義するものを残し、蘇らせるものを見つけ、新たに生み出されるものを形作りながら空間の編集を行っていく。

4. 重ね重ねてゆく

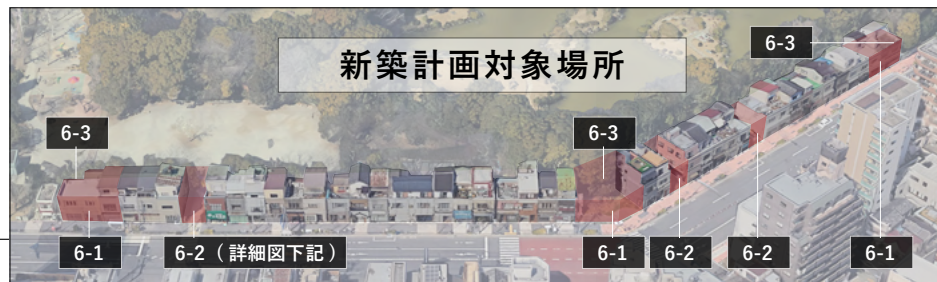
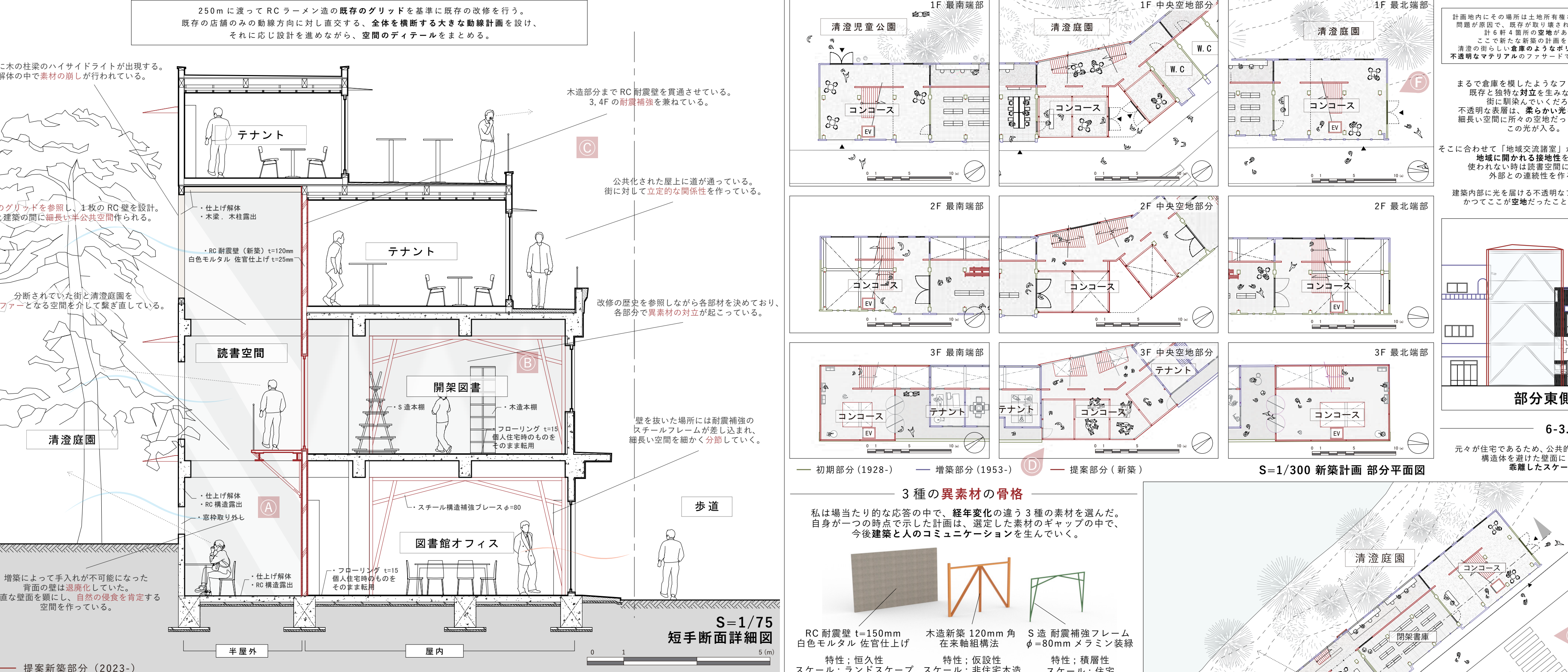
response

6. 建築と、人と街の応答関係を目指して

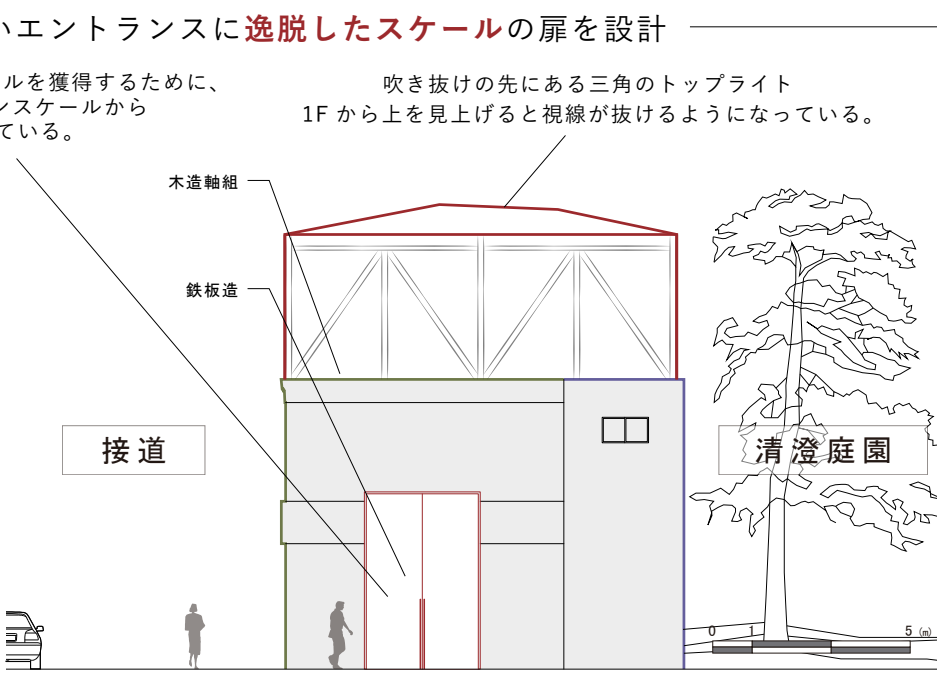
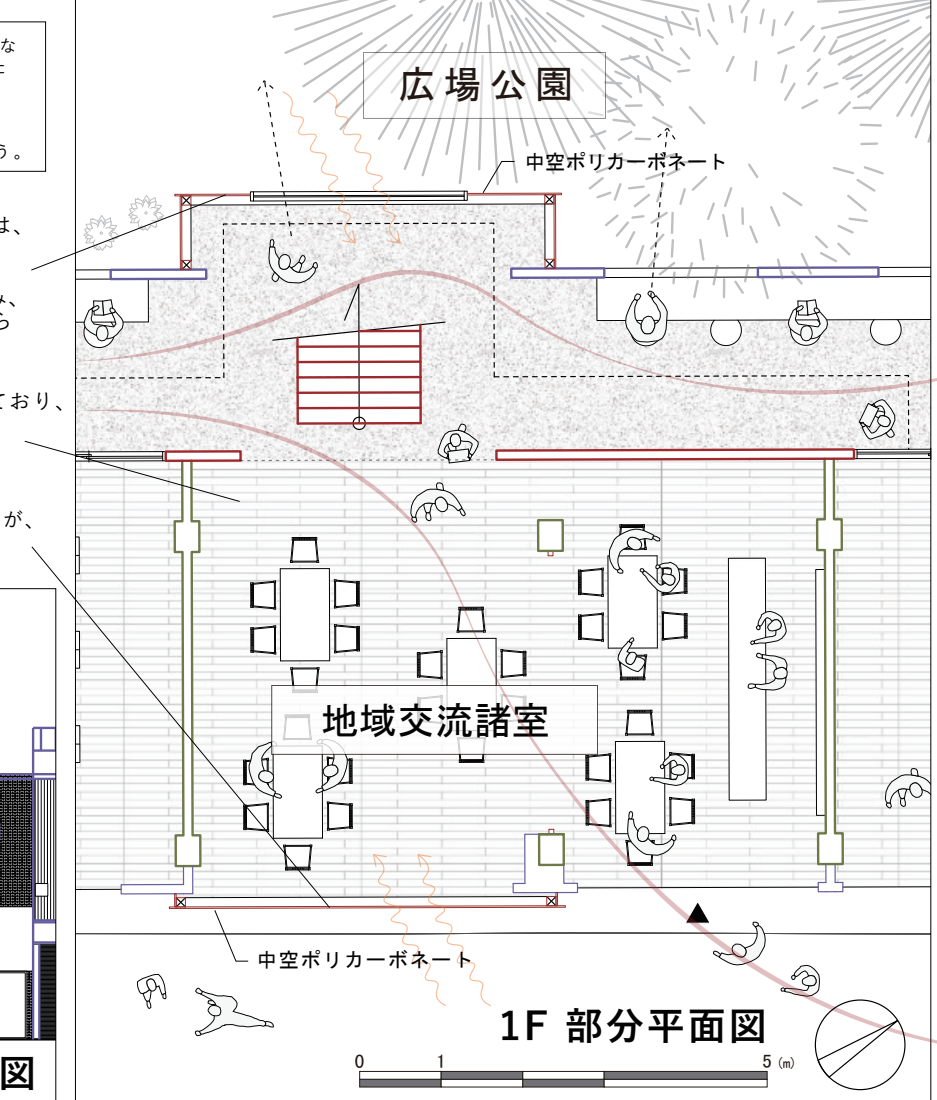
計画地内にその場所は土地所有権などの様々な問題が原因で、既存が取り壊されて生まれた計6軒4箇所の空地があり、ここで新たに新築の計画を行う。既存のグリッドが引用され、元々あったリズムを踏襲しながら空間を作る。そしてこの建築は、一時点で完成するのではなく今後も更新され続け、そこに応答を持続させる。



それらが作る風景は、かつてそこにあった風景と似た風景であるかもしれない。



それらが作る風景は、かつてそこにあった風景と似た風景であるかもしれない。



7. 塀の上、あるいは中から、

この建築は住人自身によって増改築が行われ続けてきた。それは住人によって能動的に建築に答えてきた所作だと言える。その所作の先に建築を考えると、一辺倒でない、そして断片的な応答の集積で全体性を作るべきだと感じた。また、同時に断片的设计のみでは示されないと考えたため、結果として250mの全体性が誕生した。接道と清澄庭園を分断していた塀のような建築で、持続するコミュニケーションを建築の存在と共に考えた。それは、塀の上や、塀の中を歩くような体験であり、退廃化した建築が、かつて有していた特性を受け継ぎながら、またそこで人と建築と街の関係性を取り戻す提案なのである。

